

2022. 11. 13. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書11章37～54節
『聞くことが出来ない』

「ファリサイ派の人々と律法の専門家とを非難する」という長い小標題がつく本日の聖書の箇所です。内容はイエスによる両者への非難(37～44)、律法の専門家の抗弁(45)、再度イエスによる両者への非難(46～52)という単純な構成になっています。

紀元80年代中葉の地中海世界は、ユダヤ人から見れば「異邦人キリスト教会」と呼ばれるものが林立し始めた頃でした。

初代教会には、いわば二つの危機がありました。それはみなさんもよくご存知の、この後起こってくるローマ帝国による迫害という「外」からの危機もあります。しかし、ここでいう危機とは「内」からのことを指します。

一つは、ユダヤ人キリスト者による初代教会の「ユダヤ化」の問題でした。

それはパウロを始めとする使徒たちの大きな課題でしたが、紀元70年のユダヤ戦争以降、ユダヤ教の弱体化に伴ってクリアされてゆきました。

二つめは、「異邦人」という新しい文化や価値観の急激な流入でした。

その中にはユダヤ戦争後に地中海世界に流出したユダヤ人たちも含まれていました。

このように渾然一体とした新たな環境の中で台頭してきたのが、初代教会が持つ福音というアイデンティティーをないがしろにする「形式主義」だったのです。

ルカはファリサイ派などにはおそらく一度たりとも会ったこともなかったでしょう。ただ彼らが持っていた「律法主義」というものを譬えにして眼前のリスクに向き合ったということかと考えます。

物語は「身を清める」、つまり手洗いのことから始まります。互いに重箱の隅をつつきあうようなやり取りが交わされますが、ルカがイエスの伝承を用いて主張するのは「福音の質」とは何なのかということでした。

ここで問われる「清い」という課題は初代教会の弟子たち、つまり教会が伝道

にいそしむことでした。そして、伝道とは勧誘や教義の一致ではなく、病い・障がい・高齢・差別等に苦しむ人々の現実に関わり、教育や医療、介護や社会の不当性に対する連帯した闘いでありました。これらの地道な活動を通して初めて人はイエスの言葉を福音として聞くことが出来たのです。ファリサイ派や律法学者に対するイエスの「手を汚さない」という非難はここにあります。「言葉じりをとらえよう」(54 節)という対象としてしか言葉を聞けないのです。「聞くことが出来ない」とは「不平不満しか主張できない」ということなのです。

「聞く」とはどういうことなのでしょう。わたしたちは生活の中でいろんなことを聞きます。友人や先輩、親や子、反対する者や嫌いな者、いろんな意見を聞くのです。総じて、自分以外の者の意見を聞くということは、自分が正されてゆくことです。自分は正しいとする私有観念が壊されてゆくこと、自分が拠り所としていることを問い直してゆくこと、「聞く」ということはそういうことです。

語ることも聞くことの方が消極的な受け身の態度でありながら、内的に充実して深みをたたえているのは「聞くこと」が「自分を捨てる」ことに他ならないからです。

わたしたちも聞くことの出来ない者から聞くことの出来る者へとまず変えられて行きたく願います。